

3月4日 四旬節第2主日

創 15:5~18 フィリ 3:17~4:1 ルカ 9:28~36

1. ルカ

復活されたイエスが、エマオに向かう二人の弟子に語られた次の言葉を、ルカ福音書は伝えています。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」(24:25-27)

この復活の主による説明と導きによって、使徒たちはあの山の上でのイエスの変容の出来事の意味を、始めて正しく理解しました。主の十字架と復活が救済史の出来事であって、「聖書に書いてあるとおり」(I コリ 15:3)だったということ、それによって主は栄光に入られるということを指し示す「キリストの威光を目撃した」(II ペト 1:16)ということ、初代教会は使徒たちから聞いたのでした。

“栄光”と“雲”と“恐れ”の密接な関係は、旧約聖書に親しんでいる人なら容易に理解出来ることでしょう(出 40:34、民 17:7-10)。主の顕現に直面した人間の恐れを、私たちは2月4日にも学びました(ルカ 5:8、イザ 6:5)。全能の神の御前で、人間が全く無力であることを知る“恐れ”という感覚を、使徒たちはここでも体験しました。

主イエスを“人道的博愛主義者”のように理解する人々が、使徒たちが宣教した福音とは別な方向に教会を迷わせるという事態は、決して歴史的に新しいことではなくて、昔から繰り返されて来たことであります。2世紀前半に活動したマルキオンは、旧約聖書の神を“恐ろしい神”“裁く神”、新約聖書のイエスを“優しい神”“愛の神”であると説明し、旧約聖書の神を排撃して“ルカ福音書とパウロの10個の手紙”だけからなる書物を作って、自分の教会の正典としました。カトリック教会は、以後数世紀にわたってその悪影響と戦わねばなりませんでした。

主の十字架と復活は救済史の出来事であって、それは父なる神の愛から出たことであります(ヨハ 3:16、Iヨハ 4:10)。父なる神は御子の血によって私たち教会を贖ってくださいました(使 20:28)。このキリストの福音の証言として、使徒たちはイエスの変容の出来事を語っているのです。

2. フィリ

v.18 「今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。」

かつてマルキオンが主張したように、イエスの十字架を単なる“人道的博愛”と理解し、「その御子をさえ惜みず死に渡された」(ロマ 8:32)父なる神の“秘められた計画”とは無関係な“愛の宗教”を宣伝する人々が、いつの時代にもいます。そのような「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者」のために、使徒の涙は流されました。

その“秘められた計画”を語って、使徒パウロはフィリピの教会の信徒を励ましています。

v.20-21 「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

教会とは、キリストの日に、共に神の国の恵みにあずかる者たちの共同体であることを(1:3-11 参照)学ぶことは、四旬節の大きな恵みです。主によってしっかりと立とうではありませんか。

3. 創

イスラエルの信仰告白の一つの形は、出エジプトとカナンの土地取得という救済史の出来事への感謝でありました(申 26:5-10)。それは全く主の一方的な愛による歴史でありますから(申 7:6-8)、イスラエルはその先祖アブラムの伝承をも、この救済史への信仰によって理解しました。

v.6 「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

そこにあるものは、アブラムの側の願いでも理解でもなくて、ただ一方的な神の全能と救済史の摂理です。この全能の神からのイスラエルに対する選びと計画の告知が、「恐ろしい大いなる暗黒」(v.12)と共にアブラムに臨みました。人間が全く無力であることを知る“恐れ”がそこにはあります。

アブラムの信仰、それはイスラエルを義とする神への信仰であり、さらに使徒継承の福音によって立つ教会の信仰であります。

「しかし、“それが彼の義と認められた”という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ 4:23-25)

イエスの変容の出来事における弟子たちのように、神の約束を聞いたアブラムのように、現代の教会に対しても神が、使徒継承の福音を聞くために「全地よ、御前に沈黙せよ」(ハバ 2:20)と、“恐れ”を送って臨んでくださることを、心から願いつつこの期節を歩みましょう。

アーメン。

3月11日 四旬節第3主日

出 3:1～15 Iコリ 10:1～12 ルカ 13:1～9

1. ルカ

v.3,v.5 「言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

“神の国の危機が迫っている”というイエスが語られた宣教が、使徒たちの福音の基本的な要素であることを、20世紀の通俗的キリスト者の大部分が無視して来たと言うのは、言い過ぎでしょうか。

使徒たちが宣教した福音によれば、主イエスは死者の中から復活して、来るべき(終末の)怒りから私たちを救ってくださる(Iテサ 1:10)神の子なるメシアとなりました(使 2:36、ロマ 1:4)。教会とは、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)という呼びかけに答えて洗礼を受けた人々の群であり(使 2:38)、この御子の再臨を待ち望んでいる共同体のことです(Iテサ 1:10)。

ですから、信者にとっては救済史のそのような時を見分けることが必須であり(12:54-56)、その時に間に合うように(12:57-59)「悔い改めなければ、皆同じように滅びる」(v.5)と警告されているのです。実らないいちじくの木の世界をする園丁の忍耐は、もうすでに十分な期間を過ぎました。私たちは「主の忍耐深さを救いと考え」(IIペト 3:15)、「神の寛容と忍耐とを軽んじる」(ロマ 2:4)ことのないようにしなければなりません。

しかし、多くの信者が“使徒たちが宣教した福音”を事実上学ぶことも理解することもせず、それとは無関係な現代の思想や価値観による“自己流の福音”をこれに置き換えて歩んで来ました。そこには裁きも滅びもなく、来るべき神の国の危機も存在せず、“その時に間に合うように悔い改める”という必要もありません。そのような歩みを続けて来た多くの信者にとって、聖書はもはや時代遅れの物語りを収集した昔の書き物、使徒たちが語った福音はもはや再解釈なしには現代に通用しないもの、とされています。

どこの教会でも“宣教”と称して、信者たちが主日のミサに訪れる新来者を親切にお世話するようにと努力しています。確かに皆さん、とても親切で良い人ばかりなのです。でも、善意で人を救うことは出来ないのです。「福音を告げ知らせる」(使 8:4)能力がなければ、「盲人が盲人の道案内をすることが出来るか。二人とも穴に落ち込みはしないか」(ルカ 6:39)ということになります。

2. 出

神の山ホレブでモーセに顕現された神は、「あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」ヤーウェでありました(v.6,15)。モーセがその名によって遣わされたのは、抽象的な“神”によってでもなければ、その時代、あるいはその地方の“神”によってでもありませんでした。

この神が、私たちの主イエス・キリストの父なる神であることを、現代のキリスト者はどれほど理解しているのでしょうか。私たちの聖書で“主”と翻訳されているヤーウェと切り離された“抽象的な神”は、救済史

の神でもなければ、教会の神でもありません。“イスラエルの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神”であり“わたしたちの主イエス・キリストの父である神”から、使徒たちが伝えた福音は決して切り離すことが出来ないということを、現代のキリスト者は再認識する必要があります。

ヨシュアはシケムの集会で告げて言いました。「あなたたちは……もしヤーウェに仕えたくないと言うなら、……(自由に)自分で選びなさい。ただし、わたしとわたしの家はヤーウェに仕えます」(ヨシュ 24:14-15)。同じように、現代人も自由に自分の“神”を選んで良いのです。しかし、教会が使徒継承によって受け、それによって立って来た福音(1コリ 15:1)は、「御子に関するもの」(ロマ 1:2-4)であって、現代の思想や価値観による“自己流の福音”とは全く別のものです。

モーセはイスラエルにその救いを説明するのに、「その名は一体何か」という民の問いに答えなければなりません。 “知らない神”の福音を宣教するなどということは、ナンセンスだからです。

3. 1コリ

v.11 「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。」

すべてのキリスト者にとって四旬節は、このような警告を聞くのにふさわしい時です。教会ではいつも、“福音”とは“すべての信者がよく知っていること”ということにされて来ました。そしてだれかから“福音を説明してください”と求められるときには、“これが福音だと定義するのは難しい”とか“簡単に一言では説明出来ない”などと言って逃げるのが常でした。「あなたたちは(神の国の)知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げて来た」(ルカ 11:52)と書かれている通りです。

なぜ“私はこれまで無知だった”、“だから、反省して自分で学ぼう”と正直に言わないのですか。「斧は既に木の根元に置かれている」(ルカ 3:9)と語ったヨハネの言葉を、一人一人の信者が自らへの警告として聞くことは、この期節の課題なのです。

「神の寛容と忍耐とを軽んじる」(ロマ 2:4)ことのないように、気をつけようではありませんか(v.12)。

アーメン。

3月18日 四旬節第4主日

ヨシュ 5:9～12 IIコリ 5:17～21 ルカ 15:1～3, 11～32

1. ルカ

この譬え話に登場する放蕩息子を、自分以外のだれか別の人のことのように思って読む人は、キリストの福音とも救いとも縁のない人です。彼を特別に大罪を犯した例外的な人物と考え、「あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか」(12:24)というイエスの言葉を自分に当てはめることは、見当はずれなことです。

イエスの言葉の中には、悔い改める必要のない「正しい人」が登場していますが(5:32, 15:7)、それは対比のために語られているのであって、聖書はそのような「正しい人」の救いについては何も知らないのです。聖書が語っている“救われた人”とは、神から“息子と呼ばれる資格がない”(v.21)、つまり“生まれながら神の怒りを受けるべき者であった”(エフェ 2:3)のに、今は“この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった”(v.24)と呼ばれている人々のことです。

この放蕩息子の兄は、キリストの福音を理解しないユダヤ人の象徴として描かれているのですが、かつて西欧のキリスト教にはユダヤ人をキリストを十字架に付けた“神に捨てられた民族”であるとする風潮があって、ユダヤ人迫害の理由付けに利用されました。我が国のキリスト者にとっては殆ど無縁な話のように聞こえますが、しかし、救いをキリスト教の特権のように理解して、自分がこの放蕩息子のような罪人であることを忘れ、悔い改めの信仰を軽んじて来たという点では、通じるものがあります。

父親の兄への言葉「わたしのものは全部お前のものだ」(v.31)を理解出来るキリスト者が、実際どれだけいるでしょうか。本来ユダヤ人のものであった救いと神の国の約束を(ロマ 9:4、エフェ 2:11-12)、罪人である異邦人(ガラ 2:15)も悔い改めと信仰によって共に受けることが出来るようになった(エフェ 3:6、ロマ 3:30)という、使徒たちが伝えた福音に耳を傾けることが今求められています。

2. IIコリ

v.18 「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、……」

キリストの福音が“和解の福音”であるという説明を聞いたことがあるでしょう。しかし、それが“神とわたしたちの間の和解”であることを理解している人は、決して多くありません。聖書が語る「悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)という私たちへの呼びかけが、“わたしは神に敵対していた”(コロ 1:21)という罪の事実の承認と、和解を与えてくださる神に立ち帰る信仰への招きであることを、知りましょう。使徒たちは、“罪の赦しが必要でないような正しい人になりなさい”と言ったのではなくて、「神と和解させていただきなさい」(v.20)と呼びかけました。

福音に生きるとは、そういうことなのです。「しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によって

3月25日 四旬節第5主日

イザ 43:16～21 フィリ 3:8～14 ヨハ 8:1～11

1. ヨハ

v.11 「イエスは言われた。“わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。”」

キリスト教は、ユダヤ教と共に、倫理的な宗教であると言われています。それは聖書が、神に仕えることと隣人に仕えることを結びつけているからです(マコ 12:28-34 参照)。ですから、何が罪であり、何が罪からの救いなのかを、聖書によって理解することが大切です。しかし、キリスト教の歴史を振り返ってみると、実際にはしばしば、聖書とは無関係な“別の福音”や、聖書の本来の意図から切り離された律法主義的“倫理”が、教会によって主張されて来ました。

この物語りでのイエスの言葉の趣旨は、“わたしは今ここであなたを裁かない”、“永遠の命を得て、終わりの日に復活させていただけるように、福音を信じなさい”ということであって、決して世俗的な意味での“道徳的な”人間になりなさいという教えではありません。「もう罪を犯してはならない」(v.11)という言葉は、「福音の希望から離れてはなりません」(コロ 1:23)という意味で用いられているのです(1ヨハ 3:4-10 参照)。この言葉だけを独立させて、その聖書的用語法から引き離すことは正しくありません。同じヨハネ福音書 5:14 のイエスの言葉「もう、罪を犯してはいけません。さもないと、もっと悪いことが起こるかも知れない」も、明らかに終わりの日の裁きに備える信仰の大切さを指していることを知みましょう。

今日に至るまで歴史の教会は、いわゆるキリスト教的道徳観によって、外の世界の人間を裁く傾向がありました。しかし聖書は、「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるため」と述べています(ヨハ 3:17)。むしろイエスは、「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」と言われました(ルカ 12:14)。

しかし、教会が宣教しているキリストの福音に対する現在の信仰の有無が、その人にとっての終わりの日の裁きとなるのです(9:39, 12:48)。「信じない者は既に裁かれている」と書かれているのは、そういう意味です(3:18)。

2. フィリ

使徒パウロは、「律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義」(v.9)を宣教するために、苦勞し、骨折り、大いに心を燃やしました(1コリ 11:23-29)。

宗教改革者ルターによる“神の義の再発見”の意義が、近年カトリックとプロテスタント両教会にとっての宗教的遺産として、重く受け止められるようになったことを、神に感謝したいと思います。しかし現実には、両教会の普通の信者たちの理解や論議は、救いが“信仰のみによって”か“信仰と行いによって”得ら

れるのかという、単なる表現の仕方のレベルに止まっていて、決して“良き聖書理解”には達してはいません。当時ルターが“ガラテヤの信徒への手紙”におけるパウロの戦いを想起して、“そのとき全教会が、否、福音そのものが、唯一の人間パウロにおいて立っていたということは、驚くべきことだ”と述べたその深い聖書理解に、現代のキリスト者は再チャレンジする必要があります。

「なすべきことはただ一つ」、すなわち福音への信仰をしっかりと保ち、「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」(v.13)、神の国に復活させていただく「目標を目指してひたすら走る」(v.14)ことを、神はすべての信者に求めておられます。

3. イザ

v.19 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる。」

救済史の新しい展開である神の国の到来を、あなたたちは悟らないのかと、神は現代の教会に呼びかけておられます。この神の国を受け継ぐ民として、神は教会を御子の血によって贖われました。

v.21 「彼らはわたしの栄誉を語らねばならない。」

“神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえる”(エフェ1:6)ことは、特にこの期節の教会にとっての“まことに尊い大切な努め”なのです。

アーメン。